

## 勿凝学問 207

基礎年金の財政方式、詰んでいるのに両論併記になっている理由

2008年12月14日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

昨日、学生と飲んでいると、「2年間、先生の仕事をみていると、世の中、こういうふう  
に動いているのかと分かりますよね」と。彼らは、“年次改革要望書”の存在などを知った  
ときなどは「知らない方が幸せだったかもしれない(;)」と嘆いて遊んでいるのだが、ま  
あ、彼らはゼミに所属している2年間、一日に何度も僕のホームページを覗いている。の  
みならずパスワードロックがかかった僕から彼らへの「連絡板」通じて、僕が世間に公開  
していない情報も彼らには伝えることもある。門前の小僧習わぬ経を読むではないが、彼  
らにとって幸か不幸か(?)、4年になる頃には彼らは僕の飲み友達として十分に僕の会話  
についてこられるようになる。

そして昨日も、三田の居酒屋で遊んでいた。昨日の盛り上がり話題は、『文藝春秋』の「安  
心なさい……」——「電車に乗っていたら後ろから視線を感じたので振り返ったら、先生の  
写真がこっちを見てましたよ」「安心なさい、という最も先生らしくない言葉、大ウケです  
ね」……「そうかあ、俺は、“安心なさい、留年はそれほど怖くない”くらい言いそうだ  
ぞ」……この言葉では、彼らは安心できないらしい。

そうしたバカ話の中、次の文章と経団連から送られてきた資料のギャップを学生に説明  
する話題に転じていたりする。次の文章は、ある雑誌に書いたエッセイ「基礎年金の財政  
方式、詰んでいるのに両論併記になっている理由」である。いつものように指定の文字数  
を超えてしまったので、フルバージョンを勿凝学問として公開しておく。

社会保障国民会議の中間報告(6月19日)と最終報告(11月4日)、いずれにおいても、  
基礎年金の財政方式として、税方式を一つの選択肢として現行方式との両論併記の形をと  
っている。これをみて、「なるほどお、基礎年金の現行方式と税方式には一長一短があり、  
今後ともわれわれ国民はこの両者について考えていかなければならないのかあ」と思うよ  
うでは、年金問題の素人さんあるいは世間音痴と言わざるを得ない。2006年に出した『医  
療年金問題の考え方』序論に「おそらく在野にあってわたくしひとりだけが、この2004年年金  
改革法案は、みんなが言うほど悪くはないという論陣を張りはじめた。それから先は、詰  
め将棋をして遊んでいるようなものであった」と書いたことがあるが、税方式の話は、実  
はプロの世界では完全に詰んでいる話なのである。この詰め将棋が終わってしまったのが、  
2008年だったわけである。

考えてもみよう——昨年春から年金記録問題が勃発すると、「社会保険庁に任せておくところがない」という世論を追い風にして、経済界と日経新聞、そして構造改革派の学者からなる「税方式」派は勢いを増した。そして昨年10月に構造改革派の経済学者を擁する経済財政諮問会議は、税方式について国民的議論を行なうよう指示を出す。記録問題勃発後の動きに動揺していた自民党でも、昨年9月には税方式を掲げる「年金制度を抜本的に考える会」が立ち上げられ、上げ潮派の領袖である中川秀直氏をはじめとした120人を優に越す議員が名を連ねた。そこに今年2008年1月に社会保障国民会議が立ち上げられたのであるが、物事がまっすぐに進まないのは世の常で、2月には中川氏に師事する伊藤達也氏が社会保障国民会議の担当大臣として任命されたのである。

そこに、3月に開催された第1回雇用年金分科会でわたくしは「[基礎年金租税財源化に関するシミュレーションの必要性](#)」という要望を出す。その結果が5月19日の[第4回雇用年金分科会](#)で発表される。そこで明らかにされたことは少なくとも4つあったように思われる。

- 未納未加入問題で日本の年金は破綻しないし、現在も、年金財政は危機的状況ではないこと。
- 税方式の本質は、使用者から生活者への約3.7兆円ものコストシフトであること。
- 皆年金政策をとりはじめて45年以上経つ日本の年金制度の改革は白地に絵をかくようにはいかず、税方式への移行は政治的に超えがたい難問を政治家に突きつけること。
- あり得ないことではあるが仮に税方式への移行がなされた場合、崩壊が進んでいる医療介護に回すべき税財源が大きく奪われてしまうこと。

このシミュレーション結果が発表された夜、知人の記者から「税方式の終わりの始まりですね」との連絡が届く——2008年5月19日は、普通の読解力をもっている人にとって、税方式が詰んだ日であった。しかしながら、税方式を掲げる「年金制度を抜本的に考える会」に120人以上の自民党議員がおり、福田首相も基礎年金の租税財源化を掲げる民主党との協議の機会をねらっていたのであるから、北斗の拳のケンシロウのように「お前はすでに死んでいる」というわけにはいかないことは、誰の目にも明らかであった。そうしたそぶりを見せれば、国民会議の報告書提出そのものが阻止されるリスクさえあった。だから当時、いくつかの取材の依頼を受けていたわたくしは「国民の皆様には資する判断材料を提供したまでのことですという遊びに付き合うつもりならば、インタビューに応じていいよ」と言っていた。

しかしながら、今は違う。永田町の御機嫌を損ねて報告書の提出取り止めの指示が出されるリスクもなくなり、シミュレーションの発表を機に税方式派の勢いは衰え、彼らの力は今や過去のものとなっている。そして11月に行われた社会保障審議会年金部会でわたくしは、「社会保障国民会議がやった年金財政のシミュレーション結果を勉強してください。まともな読解力をもたれている方でしたら、基礎年金の租税方式化というのは、あの時点

で、終わったことが理解できるかと思います」と発言するに至る。さらにいくつかの雑誌では、両論併記を止めて税方式論者の間違いを指摘するだけの企画を組むようになってきている。要するに、基礎年金の財政方式論争は、すでに終わってしまっているのである。ただしそれはプロの世界でのことであり、プロの世界での出来事と素人の人たちの認識の間に距離があるのは、いつもどこでも当たり前のことである。この距離が縮まるのか、それとも今のまま続いていくのか。それは、メディアがいずれの状況を面白いと判断するかにより依存するわけであり、今年2009年はどこのメディアが高い見識をもっているのかを知る手がかりとなる良い機会を与えてくれるだろうと、わたくしはひとり楽しみにしている。

この原稿の縮小版を書いた日に大学に出かけると、経団連から次の書類が届いていたわけで、なんだかねえという感じである。まあ、世の中ってのは、こんなもんだよ、諸君。。

「中期プログラム」策定に関する緊急提言

日本経済団体連合会

2008年12月9日

記

1. 中福祉・中負担の社会保障制度の確立
2. 基礎年金の税方式化

経団連は、これまで公的年金制度の改革に関し、基礎年金の税方式化が有力な選択肢であるとの主張を重ねてきた。

この点について、本年11月にまとめられた社会保障国民会議の最終報告では、税方式化を含め「基礎年金の財政方式に関する議論がさらに深まることを期待する」とされ、同じく社会保障審議会年金部会の中間的整理においても、基礎年金を税方式に転換するという考え方について「中長期的な視点で引き続き議論を行っていくべき」とされたところである。……

社会保障国民会議と社会保障審議会年金部会の両方に属していたのは、世界中で僕一人しかいないわけだけど、この経団連の文言は、その場の雰囲気をもっともお構いなしの文章だね。最近は、「権力」とは、情報受容者の無知につけ込んで、客観的に否定された主張を繰り返し言い続ける厚顔な振る舞いができる力と定義したくなっているんだけど、経団連をはじめ、みなさん立派な権力をお持ちのようで、天晴れなことです。

年金部会での議論については、次をご参照下さいませ。

- ・ [勿凝学問 200 基礎年金租税方式についての国民的議論はすでに終わっているよ——ただし、普通の読解力をもっていないと理解できない話ではある](#)